

06.12.8 一新塾名古屋勉強会 定例会記録

日時 平成18年12月8日(金) 19:00~21:30

場所 名古屋ボランティアNPOセンター

出席 植村、加部、近藤、榊原、毛利、宮田

記録 宮田

1 まちづくり協働研究所の個別具体的なプロジェクト(宮田)

個別具体的なプロジェクトとして、進行中の「加納屋の女将」と「兼松農場」の概略についての説明があった。

加納屋の女将は、地域在住の若い女性コーラスグループに地域のコンテンツ発信をブログにて発信してもらうことが発端となり、地域のコンテンツの発信についての有効なWEB上のコンテンツづくりを推進していく。いずれ岐阜や三河も含めた歴史ある宿場を軸にした編集等も視野に入れたもの。

都合合えば打ち合わせには毛利さんも来ることとなった。

一方の兼松農場は、地域の使用していない農地を流通させる手段で、かつ地域の意欲あるヒューマンリソースに監督を依頼し、地域住民に対してのサービス提供を行うもので、すでに土地と管理者、窓口が決定した。

出された問題として、管理が大変であること(モノによっては毎日)、コミュニティづくりに生かす仕掛けづくりなどあればという話だった。

これも地域の資源と人、問題解決をどう繋げるかということに端を発している。コミュニティビジネスのポートフォリオを作り、そのネットワーク化や、人的、物的、資金的支援をおこなうしくみづくり。

これが市民がつくるサービスの有効な手段になるのだということだった。

2 市民サービスづくりプロジェクトの経緯と安城での動き(榊原)

市民サービスづくりの動きは、一度まず地域の問題に入っていくことから始まるという発想転換し、各自地域の現場に入っている。そうした活動の中で、市民が集まり交流する「たまり場」を構築していこうとしている。

高瀬さんは、岐阜で起業支援などおこなうネットワークづくりをしているとのこと。

一方、安城では、エコサイクルシティ(自転車促進政策)など行政の参画しているところや、多文化共生などいろいろなところに顔を出し、現状把握に努めている。そういった活動の中で、日本福祉大学の学生がやろうとしている「まちづくり」の取り組みをエンパワーメントしていこうと「ANJO2050」というグループを立ち上げた。このグループを核に市民プロジェクト、市民事業をおしていこうとしている。

3 納税者の権利について(近藤)

論文の切れ目が近いので、まずそれを急ぐ。

現在公共の資金の流れの把握として、国家予算の流れの把握と図式化しようとしている。

国家と、地方が整合性とれる流れができれば、国としてのお金の流れの制御ができるのではないかという論理。

ただ、国家の流れは、公会計でシステムが提示されているので、トップダウンではなく、どうやってボトムアップ、つまり市民のアウトカム指標の評価に繋げていくか、そこが課題となるのではないか。

その部分は、市民という視点、立場からでないといけない点。という意見も出た。